

コメントの追加 [na1]: 彼は神奈とどういう関係でしょうか？ 早いうちに説明を入れましょう。

コメントの追加 [na2]: 不快感がすぐに理解できる良い比喩表現です。

応用編課題⑨

【名前：】

講義「寝起き」と「病気・怪我」の内容を活かして、1200文字程度の文章を書きましよう。
シチュエーション「朝起きたら風邪をひいていると気づく主人公」

「神奈ー。起きろー」

カーテンが開かれ、朝日が部屋いっぱいに入りこむ。白いベッドがより一層白く見えた。

ぼんやりとする視界で朝日が入り、思わず神奈はぎゅっと目をつむる。そしてまた頭から布団を被り直した。

「ころころ」

圭太はやれやれと神奈がいる布団を剥がそうとする。けれど布団はピクリとも動かなかった。

「仕事、遅れるぞ」

無反応。

「朝飯は神奈が好きなホットサンド」

ぴく、と少しだけ布団が動く。けれど神奈自身が出てくることはなかった。

「神奈？」

圭太は神奈の頭がある位置まで顔をよらせる。すると少しだけだが、神奈の小さな額が見えた。

「どうした？」

圭太に問われ、神奈はもごもごと口を開けた。

「……あ」

「あ？」

「あたま、いたい」

喋るだけでも痛みが走り、神奈は眉をひそめた。喉もタワシでも突っ込まれているかのような、イガイガとした感覚がある。

朝日を浴びた時に違和感があった。やけに眩しすぎるような気がしたのだ。体もいくらか鉛のように怠い。

コメントの追加 [na3]: 「仕事」とあることから成人していると推測します。一度も発熱したことがないのは少々不自然な気がしました。本当にそうなら「超健康優良児」などの補足説明を入れたいです。

「頭が痛いのか? どれ」

すると圭太は特に焦ることなく、神奈の額を触る。そのままじつとしてから手を離し、うんと頷いた。

「熱がありそうだな」

「……熱?」

「神奈は熱になったことないのか?」

「……わかんない」

「ちよつと待ってくれ」

圭太は神奈を残して部屋を出る。そして戻ってきたとき、手には体温計が握られていた。

「使い方は分かるか」

「……うん」

神奈は手を出して体温計を受けとる。脇に挟むとヒヤツとした感触があったが、冷たくて気持ちよかった。

ピピッと音が聞こえ、体温計を圭太に渡す。圭太は「ありや」と子どものような声を出した。

「三十八度六分。だいぶあるな」

「どうりで、怠いと思つた……」

「こりゃあ仕事は無理だよ。今日は休め。会社にはオレから言っておくから」

ほんぽんと頭を撫でる圭太の手つきは子どもに対するそれそのもので、神奈もまたそれを素直に受け入れる。若干、心地がいいと思つたのは秘密に。

「とにかく寝ることだな。そうすればいくらか楽にもなるから」

「うん……」

「食欲はあるか?」

「あまりない……けど、冷たいものが食べたい」

「分かつた。ゼリーかなんか買つてこよう」

圭太はさつさと寝巻きから普段着に着替え、サイフをポケットに突っ込む。それを神奈は布団越しから見ている。

いつもは頼りない背中が、なんだかとても頼もしく見える。これも熱のせいなのではないだろうか。

「あの」

「ん?」

「……ありがと」

可愛げのない掠れた声で礼を言う。圭太はニツと笑つた。

「気にすんなって」
ベッドの近くにスポーツドリンクを残し、圭太は部屋を後にした。
暫く出ていった圭太を見送っていた神奈だが、体力が底をつき、終いには泥のよう
にぐっすりと眠った。